

演劇と音響と劇場と(16)

市来 邦比古

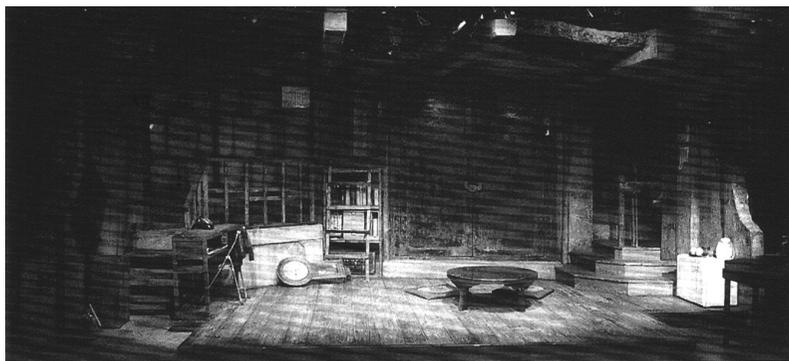
1983年から演劇作品を第七病棟だけではなく手掛けることになった。黒テントからだが、黒テントでは音楽は半分座付きのように関わっていた林光が劇音楽を書き下ろしていた。選曲を自分のアイデンティティのように思っていた私が音楽に距離を置いて劇に係わる。自由劇場との関係に似ているが、あの時は無自覚だった。今度は自覚して作品に必要な音を考えるようになっていった。

5月には第七病棟3作目となる『おとことおんなの午后』の上演となる。町屋の第七病棟稽古場での上演である。以前からシドニー・ルメット監督の映画『質屋』を作品の枠組みにできないかと劇団でのミーティングで話題になっていた。そのことを基に石橋蓮司が転位21の山崎哲に依頼して生まれた作品である。古びた大きな蔵の扉のある装置が印象的だっ



『おとことおんなの午后』のチラシ

た。スタッフは作：山崎哲、演出：石橋蓮司、美術：和田平介、照明：吉本昇・青木博志、音響：市来邦比古、舞台監督：専修定雄・渡辺修、制作：増山真吾・毛利美紀子である。キャストは緑魔子、石橋蓮司、正村和也、浅香亨、



『おとことおんなの午后』の装置

大久保誠、田所陽子、沖忠雄、堂下勝行、鈴木潤、根岸良一である。音響オペレーターは私自身が務めた。重厚な質屋の扉、最後に開いたときに眩しすぎる青空とワルシャワ労働歌のメロディ、鮮烈なイメージで幕を下ろした作品であった。

この公演の時、初めて客席を段床で基礎を組んだベンチ形式を採用し、その設計・施工のリーダーを務めた。10月に再演を行い、『ふたりの女』では100人だったキャパが120人まで増やすことができた。10月には再演を行い。事務所棟を増築して170人ほど入るようになった。そのことが今に続く劇場設計への関わりの大きな一歩だった。また始まってすぐ舞台上に枯れ葉が数枚ひらひらと舞ってくるという仕掛けを作った。初歩的な引き抜きだが演じている緑魔子の目の前に落ちるために材質や仕掛けの方法を何度も作り直した。この作品は「3年待ったかいがあった」と評され、大笹吉雄、衛紀生の朝日新聞年末回顧でベスト5に挙げられた。

8月には黒テントが「8月の劇場」と銘打った俳優座劇場との提携公演第2弾、アンジェイ・ワイダ監督の名作のもとになったアンジェイフスキの小説から佐藤信が台本を作った『灰とダイヤモンド』を上演した。作・演出：佐藤信、作曲：林光、美術：平野甲賀、照明：



オペースの筆者



『灰とダイヤモンド』のチラシ

立木定彦、振付：竹屋啓子、効果：市来邦比古、舞台監督：中村真理、照明操作：松本直み、音響操作：相沢えり子、制作：倉林誠一郎ほかである。キャストは高松正行、松井憲太郎、富田直美、村松克己、新井純ほかである。コンチネンタル・タンゴの甘美なメロディで繰り広げられるダンスが記憶に残っている。「8月の劇場」は前年、『阿部定の犬』から始まり1986年まで毎年上演していた。

10月には1979年に浅草稲村劇場で上演したはみだし劇場作品、中上健次作専修定雄演出『かなかぬち』を演出外波山文明で上演することになった。東北沢ニューージーランド大使館用



『かなかぬち』のチラシ



『マハゴニー市の興亡』のチラシ

地での野外上演だ。はみだし劇場はこのころから今に続く椿組プロデュースの形態に変わっていた。美術は第七病棟と同じ和田平介、音楽が友川かずき、音は前回上演の音を元しているため私は監修というような立場だった。

10月には藤原歌劇団公演のプレヒト作、クルト・ヴァイル作曲の『マハゴニー市の興亡』が佐藤信の演出で行われた。都市センターホールでの上演である。黒テントの仕事の流れで頼まれた。オペラは初めての仕事だが、効果音をいくつか再生したと思う。

11月には山崎哲主宰の転位21作品『子供の領分』を依頼されていた。1982年暮れの『秘密の花園』の上演中か上演後に依頼されていた。転位21は1980年結成され、1981年『うお伝説』と『漂流家族』で山崎哲が岸田國士戯曲賞をとった気鋭の劇団である。木内みどりが客演で加わっていた。中野1丁目にあった稽古場に初めて訪れた。音響操作を演出自ら行っていた。ストイックに場面を作り上げていく独特の稽古を積み重ねていた。また稽古開始に小林旭の「熱き心に」を歌いながら六方を踏むという早稲小由来の鍛錬を行っていた。壊れていく家族を木内みどりの繊細な演技と共に劇団員一体となった表現が鮮烈な思いを観客に残した作品だった。

スタッフは作・演出：山崎哲、美術：和田平介、照明：海藤春樹・三崎徹、効果：市来邦比古、舞監：青木秀夫。出演は式町ちゃこ、栗山みち、田根楽子、木内みどり、岡田潔、新地雄二、木ノ内頼仁、藤井びん他であった。

1984年1月創造集団Ambivalenceの葉桐次裕作演出『黒い哀しみのロマンセ』という作品が池袋シアター・グリーンで上演された。葉桐次裕は現代舞踊のレジェンドの一人である

11月12日
23日
下北沢 本多劇場
12時開演
14時開演
16時開演
18時開演
21時開演
23時開演

金属、トット殺人事件

前売指定席 1,000円 前売田席 1,800円
当日指定席 2,000円
電話予約 03(32)2117 03(36)40135

山崎哲

子供の領分

転位・21

中野区中野1丁目の稽古場

演出：山崎哲
美術：和田平介
照明：海藤春樹
効果：三崎徹
舞監：青木秀夫
制作：転位・21

式町ちゃこ
栗山みち
田根楽子
木内みどり
岡田潔
新地雄二
木ノ内頼仁
藤井びん

子供たちの、犯罪のすべては、
ことさらに身体的である。
なぜならば、へ家に住み、
もうひとつの家を生きる人びとの誤差は、
いつも、子供たちの身体に
積みつきより術をしないのだから。

子供たちの、犯罪のすべては、
ことさらに身体的である。
なぜならば、へ家に住み、
もうひとつの家を生きる人びとの誤差は、
いつも、子供たちの身体に
積みつきより術をしないのだから。

『子供の領分』のチラシ

檜健次の子息で自らの舞踊研究所を持ち後進の指導をする傍ら、演劇界にも身を置き、演劇作品の演出、振り付けを数多く手掛けていた。1985年から竹内敏晴の劇団に繋いでくれたのも彼である。この公演のオペレーターを頼んだのが松崎俊章である。藤居・松崎オフィスを作り、その後藤居俊夫と共に株式会社ステージオフィスの創立に加わり、世田谷パブリックシアターで共に働くことになった盟友である。

1984年4月27日から5月13日の期間で第七

病棟第4回公演唐十郎作、石橋蓮司演出『ふたりの女』の公演が下北沢の小劇場ザ・スズナリで行われた。1979年12月に荒川区町屋の稽古場で行われた作品の再演である。1982年『秘密の花園』の上演の際、毎日上演の立会いに来ていた石橋蓮司が、1983年書下ろしを依頼していた山崎哲の新作の上演企画が流れたときを懸念して本多劇場にザ・スズナリの予約を取っていたのだ。ザ・スズナリはあらかじめ用意された劇場空間というイメージが少なく、手垢にまみれた印象もない。



『ふたりの女』のチラシ

ザ・スズナリ公演後に第七病棟初の旅公演を敢行しようと企画を進めることになった。関西の舞台芸術の情報誌プレイガイドジャーナル、通称プガジャの松原利己が熱心に招へいの声を上げていた。上演場所についての注文として劇団から段床の固定客席でない方がいい。また手垢にまみれていない空間がいい、かつ3～400ぐらいのキャパがとれるところということで大阪市郊外の八尾にある八尾西武のホールが候補として挙げられた。ワンフロアで空間の自由度が高く、演劇の上演はあまりされていなく、劇場側も乗り気だということだった。しかし1月の末頃、砂を使用するということがネックとなり上演を断られて

しまった。名古屋の七つ寺共同スタジオでの上演は決めてあり、浜松からも上演してほしいということで名古屋、大阪、浜松の三か所の旅をすることで計画は進んでいた。八尾西武の担当の有井から松原の元に人形劇団クラレテの工房が空くのでどうかという声がかかって、松原から劇団に下見に来てほしいと伝えられた。そこで照明の吉本昇と私が上演個所の下見に出かけることとなった。



安治川トンネル入り口、吉本昇



スペースファンタジーDigg入り口

2月、まず大阪環状線西九条駅に降り立った。そこで合流した松原に案内され、本当に驚くからとしきりにいわれながら安治川沿いまで歩く。船の通行が激しい安治川に向かい岸にわたる橋がなかった。代わりに歩行者と自転車のための地下へ降りるエレベーターがあった。近くには渡し船もあるという。地下に降りると歩行者と自転車通行可のトンネルが川の下を通っている。ふたりの女の劇中で主人公の光一とヒロイン六条が出会うのが成田空港反対闘争の時の地下トンネルの中であると、六条から語られるのだが、同様に観客が地下トンネルをたどって上演場所へ着くという、劇的なシチュエーションが用意できるのだ。トンネルを抜けて地上に出ると倉庫街、川沿いにしばらく歩くとスペースファンタジー Digg工房と書かれたシャッターのある倉庫の前についた。ここがクラルテの工房である。入り口は何の変哲もない倉庫のように見える。中に案内されて入ると所狭しと製作途中の大型のテーマパークなどで使われる人形や工具などが置かれてあった。

4月から移転するとのことで解体する前を使わせてもらうのだ。木造の倉庫で天井は無く、むき出しの梁が印象的で、壁もスレート外壁の内側にむき出しの垂木の横棧が廻っていて、魅力あるものだった。内幅が9m、奥行き36m、梁高4.5m、最高部7mという細長い建物で、奥にはプレハブが建っていた。劇場として使用できる部分は25.5m。ここに客席と舞台を作ろうというのだ。ユニークな劇場をつくることができると確信して吉本と私は名古屋へ向かった。

名古屋の七つ寺共同スタジオでは劇場の二村に案内されて内部を見た。大須観音のそば



内部奥から入り口を望む



内部天井

にある“ザ・スズナリ”を一回り狭くした劇場で、狭いが問題ないと判断した。次は浜松である。浜松は貸しスペースで広いのだが天井が低く、大阪、名古屋とみてきた目には何とも面白みのない場所だった。浜松の招聘者の川島がやっと見つけてきた空間なので何とかここで実現できるよう努力することになった。

この下見に先立っての1月ごろだったと思う。チラシとポスターを写真でつくることになり、その撮影を京成旧博物館動物園駅で撮影した。同駅は1997年に営業停止となり、2004年廃止となった駅である。上野の博物館横から地下におりたレトロな駅で、電車の通過の合間に撮影したのを思い出す。

このころ状況劇場から劇団に電話が入った。最近の状況劇場の音響は雨宮陽一が務めてきたが、退団したので音響効果を市来に手

伝ってほしいとの依頼である。雨宮陽一は現在の館屋水夫である。劇団やジャンルに縛られない活動を志向した活動を目指して退団したのだろう。



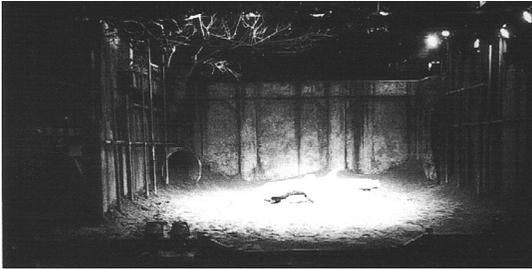
『あるタップダンサーの物語』のポスター

4月20日に福岡で幕を明けるが、音楽の選曲と効果音の作成を頼みたいとのことだった。先に状況劇場の稽古が始まるので、浜田山の稽古場を訪れた。読み稽古に入る前に音楽を決めておきたいということで俳優の佐野史郎と石川真希が中心となって劇団のライブラリから選曲を始めていた。稽古はじめに唐十郎が本読みをするのだがそこへ音楽を当てるのだ。歌などのオリジナル音楽は小室等が作曲である。劇団で見つからないものを私が提供した。この公演では第七病棟とほぼかぶっていたためお手伝いの域を出ない働きだった。出演は唐十郎、李礼仙、四谷シモン、御旅屋暁美、三浦賢二、金守珍、佐野史郎、

六平直政、千野宏、田中容子、石川真希他、スタッフは作・演出：唐十郎、舞台美術：濃野壮一、照明：秋本道男、振付：裕幸二、音楽：小室等、衣裳：宮本宣子、舞台監督：涙十兵衛、音響効果：市来邦比古、宣伝美術：及部克人、挿画：内島理加。5月に入ってから花園神社での公演はテントを膨らまし続け1000人以上の観客が入っていた。本来客席の一番後ろのオペブースが観客の海の中にポツンと浮かんだ船のようだった。

3月に入ると町屋で第七病棟の稽古が始まる。『ふたりの女』では浜辺に打ち上げられた大きな枯れ木がポイントとなる。初演の時のものは廃棄していた。九十九里まで探しに行ってみつけてきた。稽古場に装置を組み砂も入れて稽古が始まった。当時のザ・スズナリの客席ではオープニングシーンの緑魔子がうつぶせで演じる手先や顔の表情が見にくいので演技に合わせた客席を設計した。全席ベンチ形式の段床式とし、旅にも持ち回ることにした。東京と大阪は平台で基礎を組み、浜松は工事用コンパネ桟板で基礎を組んだ。この設計と製作、劇場での工事を私が率先して行った。ザ・スズナリでは照明オペの視野確保のため段差の違う段床を作った。その後の劇場設計のお手伝いをするようになる端緒である。

スタッフは作、演出、美術、照明、音響、制作までは初演と同一で、舞台監督は高橋正篤・武川喜俊、舞台部に堂下勝行、加藤英信、田村初美、正村和也、福島信子が加わっていた。舞台部は稽古期間に砂を洗い続けていた。キャストは患者3と母役の斉藤尚美が初演の大塚由美子と代わっていた。全21ステージ、5112名の動員だった。ザ・スズナリに最大302名の観客が入った。



『ふたりの女』の装置

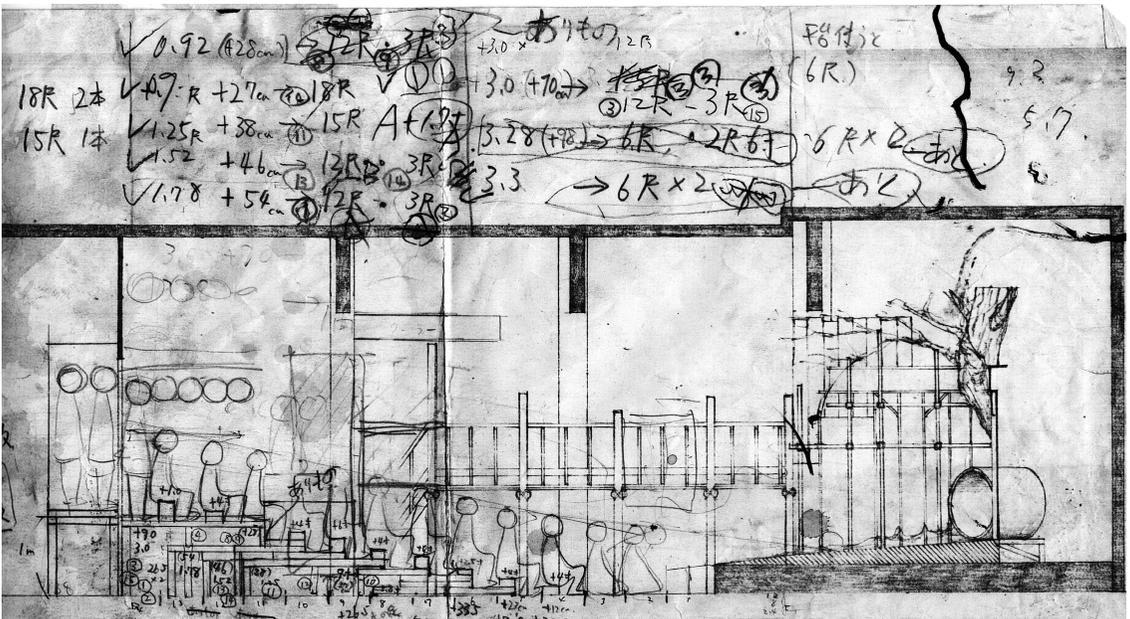
東京公演を打ち上げた後、4トンと2トンのトラックに装置、照明、音響、衣裳、小道具を載せ名古屋に出発することになった。『ふたりの女』は舞台全面の砂が敷いてあるのでそれを袋に詰めて4トン車に載せていった。2トン以上あった。またザ・スズナリの客席に使ったベンチも持ち歩くため砂の上に、足場材と共に載せた。装置のパネルもコンクリートで塗り固めたので非常に重かった。

2トン車に4トンに載らなかった装置と照明、音響、衣裳、小道具を積んだ。移動は中型バスを劇団員の鈴木潤が大型免許を取得して運転し、4トンと2トンに3人ずつ乗り、

バスに石橋蓮司、緑魔子ほかの残りメンバーが乗って、ザ・スズナリの千穂楽の翌日、午前中に出発した。私は先乗りということで2トン車の1名として乗り込んだ。東名の高速の入り口で止められた。積載過剰の疑いということで重量計に乗せられた。4トントラックに9トン積んでいるということだった。この先のサービスエリアで別チームのトラックに積み替える予定だと弁解して出発できることになった。

名古屋の七つ寺共同スタジオでは始めて以来の大入りを記録して成功裏に打ち上げた。七つ寺の客席断面が残っているので掲載する。

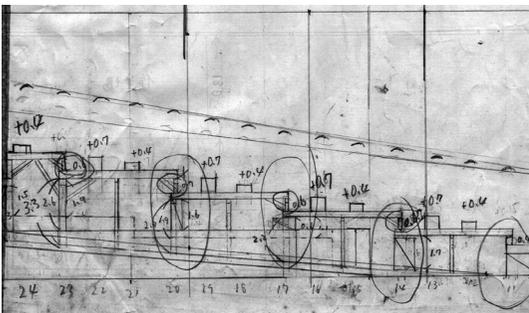
大阪には、照明の吉本昇と状況劇場の不破万作と私が、先乗りとして2トントラックで4トントラックとバスの本隊より早くファンシースペース・ディグ(チラシによる)に到着した。受け入れの松原が大阪の劇団や大学に声をかけて集まった、3～40人の助っ人が



七つ寺共同スタジオでの客席断面

待っていた。工房の中は奥のプレハブは残っているが、それ以外は一切の荷物が無くなっている、間口5間、奥行き20間の空間となっていた。壁と床の清掃を終えたころ、本体が到着した。石橋蓮司が中に入ってひとこと、「天井の埃を落とせ」、劇団のメンバーが箒を片手に梁に上がり積年の埃を落としていった。モップ掛けまでした床があっという間に埃だらけになった。資材を下ろして舞台と客席を作っていく、平台が150枚近くになるので大阪の舞台会社から借りることにしている、その荷も着いた。

私は客席を助っ人メンバーと作っていた。解体した家から出た柱材を大量に持ち込んでいた。それを現場合わせで採寸し丸ノコで切っていく。コの字型に組んだ足場を垂木と抜き板でつないでいく。作業は単純だが数が半端ない。2日かかって客席と舞台ができた。できた座席は当初450名のキャパだったが、前売りがそれ以上出ているとのことでもう100名増やした。最初の墨付けでバックヤードを1間狭くしておけばよかったと反省した。当日でもう50名ほど増やし600名近く入れた。



大阪の客席断面の一部

最後の浜松へ、大阪の千種楽の翌日、大阪から浜松に移動し、夕方には照明のつり込み作業が終わり、床面の仕込に取り掛かるはずだった。しかし到着しなかった。携帯電話などないときである。4トントラックのクラッチトラブルで吹田の名神高速入り口に入ってすぐ走れなくなってしまった。ニッポンレンタカーの4トン超ロングの代車は大阪の難波に1台あるだけだった。運転できるメンバーが難波に行って借りてきて、吹田の次のインター近くの倉庫の駐車場で積み替えを行った。予定を大幅に遅れたため急いで出発したが、また4トン車がトラブルを起こした。急いで詰め替えたためか片荷になって今度はパンクしてしまったのだ。JAFを呼んで修理して浜松についたときは21時を過ぎていた。荷下ろして宿についたのは夜半を過ぎていた。トラックが着く前に舞台監督の高橋正篤と白石英輔が天井はがしなど進めていたが、作業は大幅に遅れている。浜松入りして3日目が初日で14時にゲネプロをするはずが、客入れ寸前まで客席づくりの作業が続いた。1ステージだったが500人以上の観客を収容して上演できた。

この『ふたりの女』の再演は小さな稽古場で始まった石橋蓮司の演出法や劇団員の演技が大きな空間でも通用するという手ごたえをもたらした。次の作品『ビニールの城』の実現に大きな手掛かりとなった。他の劇団や舞踊の仕事も増えていった。今回はこれまで。

(つづく)